

0-1-3

がん患者の補完代替医療の受療に対する準備性に関する研究

Psychological readiness for CAM use among cancer patients

○平井 啓^{1),2)}, 古村 和恵¹⁾, 井倉 技¹⁾, 所 昭宏³⁾,
兵頭一之介⁴⁾, 住吉 義光⁵⁾, 伊藤 壽記¹⁾

1) 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座, 2) 同コミュニケーションデザイン・センター,
3) 国立病院機構近畿中央胸部疾患センター, 4) 筑波大学大学院, 5) 国立病院機構四国がんセンター

This study attempted to explore the psychological readiness of complementary and alternative medicine (CAM) use among Japanese cancer patients, and revealed that there were a lot of potential CAM users and psychological variables greatly influenced the stage of CAM use.

【目的】

がん患者における補完代替医療（CAM）の受療行動の実態を、前熟考期（全く関心がない）、熟考期（関心はあるが使用していない）、準備期（情報を収集している）、実行期（最近始めた）、維持期（半年以上継続して使用している）の5つの準備性の段階に分け、その心理学的背景を明らかにするために、応用行動理論を用いた質問紙調査を行った。

【方法】

3つのがん専門病院に入院中ならびに外来通院中のがん患者に対して、1100部の質問紙を配布し、521名から有効な回答を得た。質問紙の主な項目は、がんに対する何らかの効果・効用を目的としたCAMの使用に関する応用行動理論を用いた項目、自己効力感に関する項目（SEAC）、心理的苦痛に関する項目（HADS）、主観的な身体症状に関する項目（MDASI-J）であった。

【結果】

対象者の平均年齢は、59.9±11.9歳、男性246名、女性270名であった。CAM受療の準備性段階は、前熟考期74名（15%）、熟考期208名（44%）、準備期31名（7%）、実行期66名（14%）、維持期92名（20%）であった。CAM受療の理由を尋ねる項目のうち、Pros（恩恵・メリット）の項目で最も「あてはまる」の頻度が高かったのは、「体力・免疫力が高まる」（N=272 [53.1%]）であり、Cons（負担・デメリット）では、「副作用が気になる」（N=187 [37.9%]）であった。CAM受療の準備性段階別にPros得点、Cons得点を比較したところ、前熟考期から実行期のように準備性の段階が上がるにつれ、Pros得点は有意に高くなる（ $p<.001$ ）のに対して、Cons得点は有意に低くなる（ $p<.001$ ）ことが明らかになった。また、準備性の段階が高くなるにつれ、家族からの期待得点が有意に高くなっていた（ $p<.001$ ）。

【結論】

がん患者において、CAM受療の準備性の段階が上がるに伴って心理的態度の内容が変わり、家族からの影響が強まることが明らかとなった。よって、がん患者がCAMの使用に心理的態度が大きく関与していることが示された。